

2024年10月6日（日）「第五のラッパ ～バッタの襲来～」

ヨハネの黙示録 9:1-11

1 第五の天使がラッパを吹いた。すると、私は、一つの星が天から地上に落ちるのを見た。この星には、底なしの淵に通じる穴を開く鍵が与えられた。2 その星が底なしの淵の穴を開くと、大きな炉から出るような煙が立ち上り、太陽も空も穴から出る煙で暗くなった。3 その煙の中から、ばったの群れが地上へ出て来た。これらのばったには、地上のさそりが持っているような力が与えられた。4 ばったは、どんな地の草も青草も木も損なってはならないが、ただ、額に神の刻印のない者には害を加えてもよい、と言い渡された。5 殺してはならないが、五か月の間、苦しめることは許されたのである。ばったの与える苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であった。6 その間、人々は死を求めても与えられず、死を切に望んでも、死のほうに逃げて行く。

7 そのばったの姿は出陣の用意の整った馬に似て、頭には金の冠のようなものを着け、顔は人間の顔のようであった。8 髪は女の髪のように、歯は獅子の歯のようであった。9 胸には鉄の胸当てのようなものを着け、その羽音は、多くの馬に引かれて戦場へとひた走る戦車のとどろきのようであった。10 また、さそりのような尾と針があり、その尾には、五か月の間、人に害を加える力があつた。11 ばったは、底なしの淵の天使を王として戴いている。その名は、ヘブライ語でアバドンと言い、ギリシア語ではアポリオンと言う。

【序論】

イギリスの作家ジョン・バニヤンの『天路歷程』(The Pilgrim's Progress)をお読みになったことがあるでしょうか。今日の箇所からこの本を連想する人もいらっしゃるかと思います。この物語では、「破滅の町」に住んでいた主人公「クリスチャン」が「落胆の沼」「世俗の町」「ベルゼブルの砦」といった様々な障害を掻い潜りながらキリストの十字架に辿り着き、そこで重たい荷物が取り除けられ、主イエスへの忠誠を誓い、最終的に「天の都」へと到達する人生の航路が豊かなイメージとともに描かれています。しかし、十字架の救いを受けてからも「困難の丘」「屈辱の谷」「死の陰の谷」「虚栄の町」「道草の原」「楽しみの方山々」「うぬぼれの国」「魔法の国」「ベウラの国」といった新たな困難を乗り越えていかなくてはならず、時に命の危機に直面することもあります。「屈辱の谷」で遭遇するのが「底なし沼」に棲んでいた「アポリオン」という怪物です。火の矢を放ってくるこの魔王と一騎討ちをする場面は手に汗を握ります。

「こちらに向かって飛ぶように駆けてくる者の姿が見えた。その名はアポリオン、底なし沼に住む魔王である(黙示録9:11)。その姿を見たクリスチャンは怖くなって、逃げた方がよいかと迷ったが、ここでも突き進んで行こうと決心した。アポリオンはクリスチャンに近づくと、軽蔑の目を向けて行った。『お前はどこから来て、どこへ行くのだ?』『私は罪に満ちた「滅びの町」を出て、天の都に向かっているところです』と、クリスチャンが答えると、アポリオンは『なんだと。するとお前は、以前は俺さまの家来だったというわけだ。

「滅びの町」の王は、この俺さまだからな。ところでお前は何が気に入らずにあの町を逃げ出すことにしたのだ？ どんな王だって自分の家来を失いたくはないものだ。俺さまだって同じこと。さあ「滅びの町」に戻るがよい』『それはできません。私はあの方に忠誠を誓った身です。何を言われようが、戻る気はありません』『お前は俺さまを怒らせたいのか。よし、もう一度だけチャンスを与えてやる。いいか、今すぐに引き返して俺さまの町に戻るのだ！ そうすれば大目に見てやろう。そうしなければ命はないものと覚悟しろ』

こう言って威嚇するアポリュオンに、クリスチャンも負けてはいなかった。『アポリュオン。よく考えてみろ。この道は私の仕える王のものだ。邪魔だてすると、赦しはしないぞ』。するとアポリュオンは『俺さまには、怖いものなど何もない。この場でお前を殺してやる』と言うと、クリスチャンめがけて燃える火の矢を投げつけた。クリスチャンは盾でそれを払いのけながら、腰の剣を抜いたが、アポリュオンの矢を浴びて頭と足に傷を負い、勢いを止められてしまった。アポリュオンは、このときとばかりに襲いかかり、クリスチャンを思い切り投げ飛ばした。倒れた拍子にクリスチャンの手から剣が落ちた。アポリュオンは『命はもらった、覚悟しろ！』と叫んでクリスチャンにとどめを刺そうと襲い掛かった。そのときクリスチャンの手が、落とした剣を探り当てた。『おごるのはまだ早いぞ、アポリュオン！』と言うとクリスチャンは、アポリュオンの腹に剣を突き刺した。すると、アポリュオンは翼を広げ、あっという間に飛び去っていった。その後、アポリュオンがクリスチャンの前に姿を現すことはなかった。」(p. 36-38)

今日の箇所では、「アポリュオン」の手下であるバツタの大群が登場します。11節でも説明があるように、「アポリオン」はギリシャ語、「アバドン」はヘブル語、共に意味するところは「破壊」です。

【本論】

本論A. 「一つの星」と「底なしの淵」

第五の天使がラツパを吹いた。すると、私は、一つの星が天から地上に落ちるのを見た。この星には、底なしの淵に通じる穴を開く鍵が与えられた。(9:1)

8章で見た第一から第四までの災いは、「血の混じった雹と火」「火の燃え盛る大きな山」「松明のように燃えている大きな星」「太陽の三分の一、月の三分の一、星という星の三分の一が撃たれる」というものでした。これらは直接的に人間に害を加えるものではなく、間接的に多くの人に影響を及ぼすものであったと言えます。それに対し、第五の災いは直接的に人間に害を加えるものとなる。「一つの星」とは御使いのような存在で、審きの扉を開くための鍵を持ってやって来ました。その鍵によって「底なしの淵に通じる穴」が開かれました。この淵の中には悪しき霊が住んでいて、闇の勢力が封じ込められていましたが、その扉が開かれてしまうのです。

その星が底なしの淵の穴を開くと、大きな炉から出るような煙が立ち上り、太陽も空も穴から出る煙で暗くなった。(9:2)

「煙」は神の審きを象徴するもので、神を信じない者に対してモクモクと立ち上りました。

その煙の中から、ばったの群れが地上へ出て来た。これらのばったには、地上のさそりが持っているような力が与えられた。(9:3)

バッタの大群は写真や動画で見たことがあります。空も見えなくなるほどの凄まじい数でやって来て、草という草を食い荒らしてしまう光景は恐ろしいです。しかし、ここに登場するバッタは、私たちが自然界で見るバッタとは全く異なる性質を持っています。まずここでは、「さそりが持っているような力」が与えられたとされている。さそりの実物は、日本では動物園などに行かなくてはなかなか見られませんが、刺されると危険な生き物で、激痛と局所の炎症、皮膚組織の壊死、意識障害や呼吸困難、ひどい場合はショック死もあるようです。実に厄介な能力がこれらのバッタに与えられたこととなります。

ばったは、どんな地の草も青草も木も損なってはならないが、ただ、額に神の刻印のない者には害を加えてもよい、と言いつ渡された。殺してはならないが、五か月の間、苦しめることは許されたのである。ばったの与える苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であった。その間、人々は死を求めても与えられず、死を切に望んでも、死のほうに逃げて行く。(9:4-6)

通常バッタは草を食べますが、ここではただ人間に害を及ぼすことだけを目的に派遣されており、逆に草木は一切食べません。そして、このバッタに刺されると、五か月間苦しめ続けるといいます。五か月というのは、春から夏にかけて生存するバッタの寿命を表しているのでしょうか。バッタの恐ろしい特徴について、続く節ではより詳しく説明されています。

そのばったの姿は出陣の用意の整った馬に似て、頭には金の冠のようなものを着け、顔は人間の顔のようであった。髪は女の髪のように、歯は獅子の歯のようであった。胸には鉄の胸当てのようなものを着け、その羽音は、多くの馬に引かれて戦場へとひた走る戦車のとどろきのようであった。また、さそりのような尾と針があり、その尾には、五か月の間、人に害を加える力があつた。(9:7-10)

いくつかの注目すべき点があります。「金の冠」は「支配」を意味し、人間に対してどうにもできない支配力をもって臨んでくるので、逃げて隠れても捕まってしまうということでしょう。「人間の顔のよう」とは、このバッタが知的能力を具えていることを意味し、ただ本能のままに行動するのではなく、標的を定めて襲ってくるということです。「女の髪のように」とは、長い触覚が無数に生えていること。どこに誰がいるかを敏感に読み取るということでしょう。「獅子の歯」は、獰猛さ、残忍さ、凶暴さを意味し、その容赦なき攻撃性を表しています。「鉄の胸当てのようなもの」とは、叩き殺そうにも頑丈で手の施しようがないこと。「羽音は、多くの馬に引かれて戦場へとひた走る戦車のとどろきのよう」とは、おびただしい数で群がってくる様子を描いています。

1866年にアルジェリアを襲ったバッタの大群は、あらゆる農作物を食い尽くし、その影響で20万人もの人々が餓死したそうです。ここでのバッタの害はそれとは異質なものが、集団で襲ってくるときにどうにもならない自然界の力を目の当たりにするでしょう。

本論B. 神の刻印

さて、このバツタの標的になるのは「額に神の刻印のない者」（4節）に限られるということが重要なポイントになります。この「神の刻印」は7:3-4に出てきたものと一致しているでしょう。

「私たちが神の僕の額に刻印を押すまでは、大地も海も木々も損なってはならない。」私は、刻印を押された人々の数を聞いた。それはイスラエルの子らの全部族の中から刻印を押された人々であり、十四万四千人であった。（7:3-4）

また、この刻印は別の表現で「白い衣」としても登場していました。

この後、私は数えきれぬほどの大群衆を見た。彼らはあらゆる国民、部族、民族、言葉の違う民から成り、白い衣を身にまとい、なつめやしの枝を手を持って、玉座と小羊の前に立っていた。（7:9）

「額の印」も「白い衣」も、その人が「神のもの」であることを表しており、そのしるしを見るときに神の審きは通り過ぎるのです。これはまさに出エジプトのときにイスラエル人の家の門柱と鴨居に塗られた「小羊の血」と同じ意味を持っています。

- ・ あなたがたの小羊は欠陥のない一歳の雄の小羊でなければならず、羊か山羊の中から一匹を選ばなければなりません。あなたはそれを、この月の十四日まで取り分けておき、夕暮れにイスラエルの会衆は皆集まってそれを屠る。そして、その血を取って、小羊を食べる家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る。（出 12:5-7）
- ・ あなたがたがいる家の血は、あなたがたのしるしとなる。私はその血を見て、あなたがたのいる所を過ぎ越す。こうして、エジプトの地を私が打つとき、滅ぼす者の災いはあなたがたには及ばない。』（出 12:13）

エジプト全土に神の審きが下ったとき、神はこの「小羊の血」を見ることにより、エジプト人からイスラエル人を取り分け、審きを免れさせました。これと同様の意味をもつものが聖書には数多く出てきますが、旧約聖書の中からも一つ例を挙げるならば、イスラエルがカナンの地に攻め込んだときに、その斥候をかくまったということで命を守られた遊女ラハブ一家が思い出されます。

二人は彼女に言った。「あなたが我々に誓わせたこの誓いについて、我々は責任を果たそう。我々がこの地に攻め入るとき、この深紅のよりひもを、我々をつり降ろした窓に結び付けておきなさい。あなたの父、母、兄弟、家族全員を、あなたのいる家に集めておきなさい。

（ヨシュア 2:17-18）

ここに出てくる「深紅のよりひも」は、やはり「命を守るもの」としての役割を果たしました。これらはやがて来るものの予型であり、キリストの血を予表するものでした。十字架で流された主イエスの血は、それを受けた人にとって「神の刻印」となり、神の審きを通り過ぎさせるものとなるのです。私たちが聖餐式においていつも確認していることはこのことであり、裂かれたパンはキリストの裂かれたからだを、ぶどう酒は流された血を意味し、それらを飲食することはその人が「神のもの」であることを証しているのです。

【結論】

今日の箇所が読者に伝えていることは何でしょうか。バツタによる恐ろしい審きを示すことで、読者を恐怖に陥れようとしているのでしょうか。いいえ、そのような日が到来することを知らせ、それに備えさせようとしているのです。それゆえに、読者の額に「神の刻印」が押されているかどうか今一度確認するよう訴えられているように思います。また、まだ「神の刻印」を持っていない人は、ためらわずそれを受け取るべきことが促されてもいます。それは、イエスの血潮を受け取ること、福音の真理を心で受け入れることです。そして、このバツタによる審きの期間が「五か月」であるということは、一定の短い期間の苦しみを意味し、最後の悔い改めの機会が与えられていることをも示しているように思います。今、私たちはどの位置にいるのでしょうか。自分の霊的状态を吟味し、どう行動すべきかを考え、ためらわず決断したいと思います。

【祈り】

信じる者を守り給う、天の父なる神様。黙示録には、世の終わりに起こる様々な現象が描かれています。それを真正面から読むのは恐ろしいことであると同時に、それでは如何に生きるべきかという問いかけが迫ってまいります。私たちの額には「神の刻印」が押されているのでしょうか。それは、私たちの生き方を通して証しされるものです。どうか福音に生きる者とならせてください。主イエスの心を私たちも持つことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

信じる者の額に「神の刻印」を押し、終わりの日の審きを免れさせ給う、父なる神の愛、聖餐のパンと杯をもって、救いの「しるし」となし給うた、主イエス・キリストの恵み、霊性状態に気づきを与え、常にへりくだった心で歩ませ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。